

平成15年度宮城の発掘調査パネル展

宮城県教育庁文化財保護課

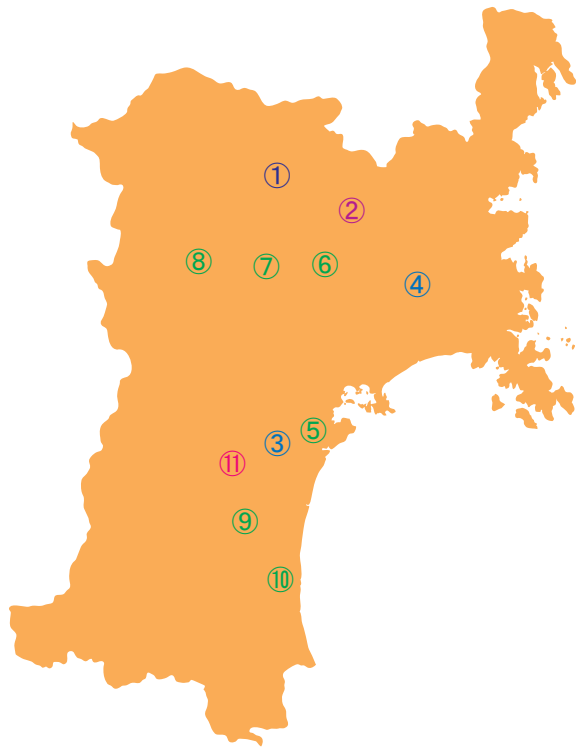
2004年3月22日～4月2日 県庁1階ロビーにて開催

宮城県には、旧石器時代から江戸時代まで6000ヶ所余の遺跡があります。これらは私たちの祖先が残した貴重な遺産であり、大切に保存し後世に伝えていくことは私たちの責務と考えております。

県教育委員会は、これらの保護に全力をあげて取り組んでおりますが、開発に伴って姿を消す遺跡もあり、それに対してはやむをえず発掘調査を実施しています。

このたび、本年度に行った発掘調査の中で特に話題になった遺跡をパネルで紹介することになりました。この機会に文化財に親しみ、文化財の保護に対してご理解を深めていただければ幸いです。

今回の展示にあたって快くご協力をいただきました各教育委員会・機関に対しこの場を借りて厚く御礼を申し上げます。



平成15年度調査のおもな遺跡

- ①伊治城跡（築館町）「後期旧石器時代の石器製作場」
- ②坂戸遺跡（迫町）「ダルマ形の炉をもつ竪穴住居」
- ③鴻ノ巣遺跡（仙台市）「北の地域と交流があったムラ」
- ④角山遺跡（桃生町）「丘陵に作られた大規模なムラ」
「カマドに石を使った住居」
- ⑤多賀城跡（多賀城市）「基礎に石垣を用いた築地塀」
- ⑥新田柵跡（田尻町）「何度も建て替えられた役所の建物」
「湿地の中の大土木工事」
- ⑦名生館官衙遺跡（古川市）「役所を囲む溝と櫓状建物を発見」
- ⑧壇の越遺跡（加美町）「塀で囲まれた建物群」
- ⑨前野田東遺跡（名取市）「愛島丘陵から多くの建物を発見」
- ⑩三十三間堂官衙遺跡（亶理町）「陸奥国亶理郡衙の正殿跡」
「郡庁院南門跡・塀跡を発見」
- ⑪仙台城跡（仙台市）「しだいに明らかとなる大広間」
「御成門跡を確認」

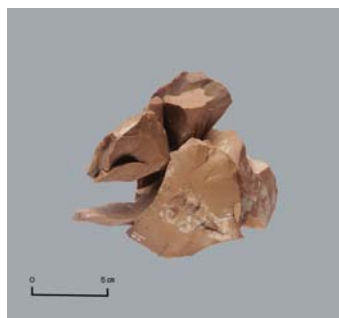
後期旧石器時代の石器製作場



石器製作場の跡

① 伊治城跡（築館町）

国史跡の伊治城跡を調査した際に、2万年以上前の石器が約400点も集中して発見されました。その中には、石器を作るために打ち欠いた石片が接合するものや、石器を作った際に飛び散った小さな石くずなどが含まれており、この場所が石器を製作した跡だとわかりました。



接合された石器

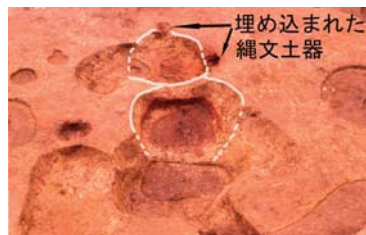
旧石器時代

ダルマ形の炉をもつ竪穴住居



建て替えが見られる竪穴住居

② 坂戸遺跡（迫町）



古い炉

伊豆沼南側の丘陵に立地する縄文時代中期～晩期（約4000～2500年）のムラの跡です。写真は縄文時代中期末の竪穴住居跡です。形は円形で、大きさは直径が約9mあります。住居のほぼ中央にダルマ形の炉があり、その先端に縄文土器を横倒し、または斜めに埋め込んでいます。炉は住居の建て替えの際に作り替えられています。

縄文時代

古墳～
飛鳥時代

北の地域と交流があったムラ



堀と堀で囲まれたムラの跡

③ 鴻ノ巣遺跡 (仙台市)



右：在地の土器・石製品
左：北海道系の土器・石器

材木塀と幅5mの堀で囲まれた古墳時代中期(5世紀)のムラの跡が発見されました。竪穴住居は密集して作られており、多くの人々が住んでいたとみられます。住居跡やその周辺からは、地元の土器や石製の道具とともに続縄文土器や黒曜石製の皮なめし具など、北海道や東北地方北部の人々が使用した道具も出土しており、ムラはこうした地域と交流があったことがわかりました。

丘陵に作られた大規模なムラ



大規模なムラの跡



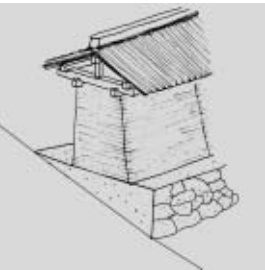
出土した土器

三陸自動車道建設に伴う調査で、7世紀前半から10世紀頃の竪穴住居や掘立柱建物などが多数発見されました。これらは傾斜が急な丘陵にまで作られており、大規模なムラの跡だとわかりました。このうち7世紀前半の住居からは土師器が多数出土しています。その中には岩手県の水沢市から盛岡市にかけての土器と同じ特徴を持つものが含まれており、当時の交流を考える上で貴重な資料です。

基礎に石垣を用いた築地塀



築地塀調査の様子



築地塀模式図

⑤ たがじょうあと 多賀城跡 (多賀城市)

多賀城跡の外側は、築地塀や材木塀によっていびつな四角形に囲まれていました。北辺の中央部分では、築地塀は幅4mの基礎の上に立っており、外側(北側)は土留めのための石垣が積まれています。石垣は人頭大の石が3～4段積み、高さは1mほどになります。塀の高さは本来3m前後あったと考えられます。基礎に石垣を用いた築地塀は、城柵(役所)で初めての発見となりました。

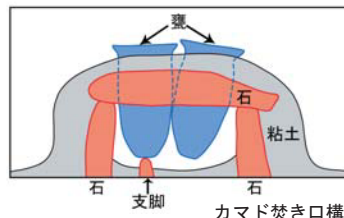
奈良～
平安時代

④ かどやま 角山遺跡 (桃生町)

カマドに石を使った住居



竪穴住居のカマド跡
カマド左側の土器は後で捨てられたもの



カマド焚き口構造図

焚き口に門のように石を組み、それを芯にして粘土を貼り付けて作ったカマドを持つ住居が発見されました。

カマドの中からは調理用の壺やそれを支える支脚が出土しています。このようなカマドの作りは、隣町の河北町新田東遺跡でも確認されています。

用語解説

◆土師器：800℃くらいの低温で焼かれた赤褐色や黄褐色の比較的やわらかい焼き物。食べ物をもった碗・杯や、調理や貯蔵に使われた壺・甕などがある。

◆続縄文土器：北海道を中心とする日本列島北部は、縄文文化に後続して続縄文文化を形成した。その時代に作られた焼き物を続縄文土器という。

◆城柵：辺境の支配拡大のために作られた役所。国府の出張所的な性格を持ち、長官は中央政府から派遣された。城柵がおかれた地域は政情が不安定だったので、兵隊が駐留した。

◆築地塀：土塀に屋根を葺いたもの。

何度も建て替えられた役所の建物



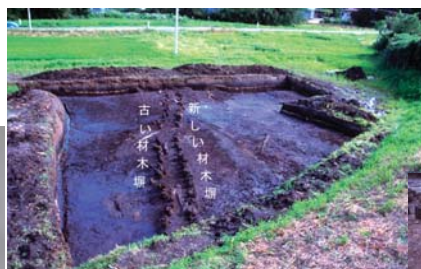
奈良・平安時代に大崎地方を治めた城柵跡で、役所の実務を行ったとみられる建物跡が発見されました。建物は整地を繰り返して3回も建て替えられ、2～4時期目は格式の高い四面廂付建物跡になっていることから中心的な建物とされます。周辺からは事務に使用した円面硯（円形の硯）や土器が出土し、100年以上この場が実務域だったことがわかりました。

⑥ 新田柵跡（田尻町）

にしたのさくあと



円面硯



材木堀跡

新しい材木堀の断面



南部の湿地で、遺跡内を区画している材木堀を発見しました。堀は、軟弱な地盤を改良するため丸太材等を埋めて補強されています。さらに周辺の土を中央に盛り上げて嵩上げし、据え穴を掘った後、面取りした材木を密に並べて作られています。堀は2列ありますが、写真左列の堀が古いことがわかっています。古い堀にはクリ材が、新しい堀にはクリ材やコナラ材などが使われています。

役所を囲む溝と櫓状建物を発見

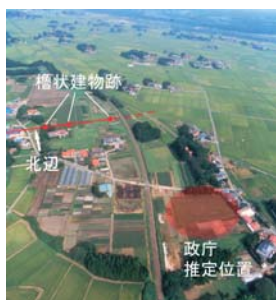


櫓状建物跡
人の立つところが柱の位置

⑦ 名生館官衙遺跡（古川市）

みょうだてかんのが

奈良時代の役所の外側は、北辺と西辺を平行する2本の溝で囲まれていました。北西部分の調査では、東西方向の溝跡とその内側に建つ櫓状建物跡などが発見されました。これまでの調査と合わせると、北辺の溝跡は東西130m以上続いており、櫓状建物跡は4基確認されています。本遺跡は玉造郡衙（郡役所）跡と考えられています。

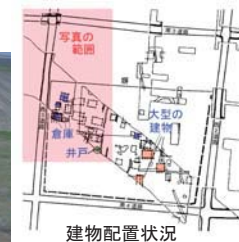


奈良時代の政庁推定位置と北辺

堀で囲まれた建物群



屋敷跡の様子



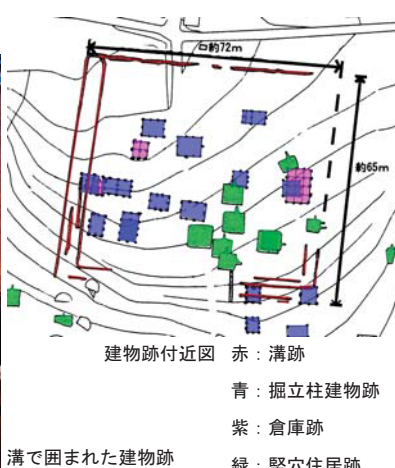
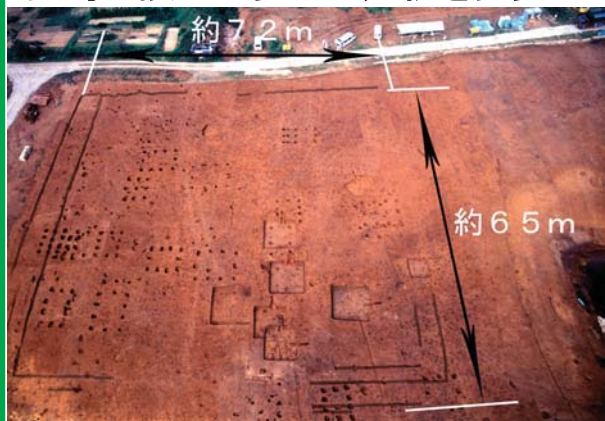
建物配置状況

⑧ 壇の越遺跡（加美町）

だんこし

賀美郡衙である東山官衙遺跡の南側は、道路によって1町（約109m）単位に基盤の目状に区割りされていることがわかっています。南3・4道路、西2・3道路付近の調査では、8世紀中頃から9世紀前半頃の堀で囲まれた建物群が発見されました。区画内には大型の建物や倉庫、井戸などが確認されています。郡衙の役人が有力者の屋敷跡と考えられます。

愛島丘陵から多くの建物を発見



⑨ 前野田東遺跡（名取市）

まえのだひがし

愛島丘陵南斜面で、溝で区画された建物群が確認されました。区画の大きさは東西約72m、南北約65mで、内部からは倉庫やその他の掘立柱建物跡が発見されています。竪穴住居跡は区画の南東部で集中して見つかりました。9世紀頃の土器が出土していることから、平安時代の有力者の屋敷跡と考えられます。

奈良～
平安時代

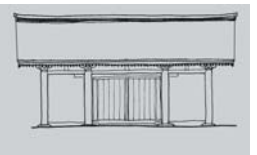
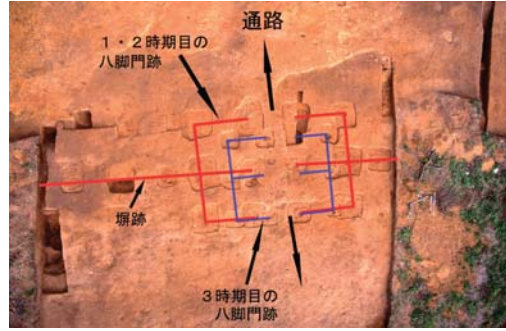
陸奥国亶理郡衙の正殿跡



正殿跡
人の立つところは、1・2時期目の正殿の柱の位置

平安時代前半（9～10世紀前半）に陸奥国亶理郡を治めた郡衙跡です。役所の中心である郡庁院を調査した結果、郡庁院の中央やや北側で、重要な執務などが行われた正殿跡が発見されました。正殿は2回建て替えられています。大きさは1・2時期目の建物は東西18m、南北7.2mですが、3時期目は東西が15mと小さくなっています。

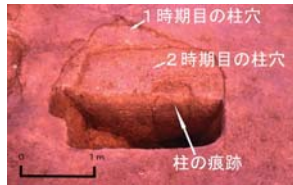
郡庁院南門跡・塀跡を発見



八脚門の模式図

八脚門跡

⑩ 三十三間堂官衙遺跡（亶理町）



正殿南東隅柱穴



正殿跡と南門跡

郡庁院の南辺を区画する塀跡と、それに取り付く南門跡が発見されました。塀は一定の間隔で柱を立て、柱の間を板材でふさいだものです。南門は八脚門と呼ばれる格式が高いもので、正殿の南正面に位置します。正殿との距離は約40mあります。正面中央2本の柱の間に扉が付き、通路になります。門は正殿と同様に3時期目が小さくなります。

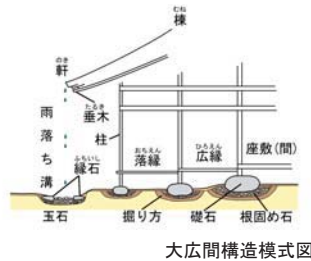
しだいに明らかとなる大広間



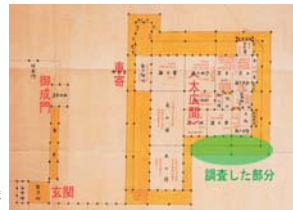
大広間跡南東部で見つかった礎石跡・雨落ち溝の状況

絵図に描かれた大広間
『仙台城旧本丸御殿形図』部分 仙台市博物館蔵

大広間は本丸御殿の主要な建物で、畳敷きの部分が約260畳、周りの縁側部分を含めると約430畳の広さがあり、仙台藩の政治や儀式的場でした。人が立つところが建物の礎石の位置、手を広げているところが雨落ち溝です。絵図で見ると、今回の調査地点は緑色の部分、大広間の南東部分と考えられます。雨落ち溝は、約50cmの幅で両側に平たい縁石を並べ、内側に玉石を詰めています。



大広間構造模式図



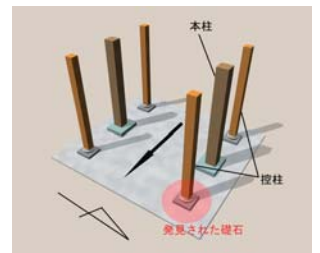
⑪ 仙台城跡（仙台市）

本丸詰門から大広間の車寄へ向かう途中に、將軍などを迎えるための特別な門である御成門がありました。絵図によると、御成門は切妻屋根の四脚門であったことがわかります。調査の結果、北東隅と考えられる控柱の礎石が確認されました。礎石は1.2m×1.0mの大きさで、50cm四方の柱座を作り出し、柱を据えるための四角いほぞ穴を開けるといふ丁寧な加工が施されていました。

御成門跡を確認



御成門跡礎石検出状況



御成門模式図

安土桃山
～江戸時代

◆陸奥国：平安時代の陸奥国の範囲は、岩手県盛岡市周辺から宮城県・福島県を含む広大な地域である。それぞれの国を治める組織を国府といい、陸奥国の国府は多賀城におかれた。

◆仙台城：伊達政宗築城。本丸、二の丸、三の丸（蔵屋敷）などがあった。江戸や明治の火災、明治維新の取り壊し、戦災によって建物のほとんどが消失。現在、本丸の石垣修復や地下に残る建物などの跡（遺構）の調査を仙台市教育委員会が行っている。

協力（五十音順）

加美町教育委員会…壇の越遺跡／仙台市教育委員会…鴻ノ巣遺跡・仙台城跡
多賀城跡調査研究所…多賀城跡／田尻町教育委員会…新田柵跡／築館町教育委員会…伊治城跡／名取市教育委員会…前野田東遺跡
迫町教育委員会…坂戸遺跡／古川市教育委員会…名生館官衙遺跡／亶理町教育委員会…三十三間堂官衙遺跡

文化財保護課のホームページアドレスは、<http://www.pref.miyagi.jp/bunkazai/index.htm>